

京都経済4団体による職業教育協力講義

同志社大院「地域力再生実践論」講師決定

4大学(院)での授業内容 出そろう

京都経済4団体共同によるパイロット事業、4大学(院)での協力講義(職業教育)のうち、後期開講の同志社大学大学院「地域力再生実践論研究」(担当＝今川晃政策学部教授)の授業日程と協力講師が決まりました。これにより、今年度予定の事業がすべて出そろいました。他の講義は、先行した前期授業の京都産業大学「グローバル人材論特殊講義」(担当＝中谷真憲法学部教授)が7月5日までに12回の協力授業を終了し、同月19日には受講生と講師が一堂に集まって“ふりかえり会”を行いました。龍谷大学の「企業のCSR実践論」(担当＝勝山亨政策学部講師)も6月に2回の協力授業を行っています。立命館大学の「グローバル人材養成プログラム」(通年実施)は着々と進行しています。

黒竹、小林、細尾の3氏 同志社大院

京都経済4団体の協力講義の一つ、後期科目の同志社大学大学院総合政策学研究科「地域力再生実践論研究」では、15回の授業(毎週木曜20時5分～21時35分)のうち3回分を担当することになっていましたが、このほど3氏に担当していただくことが決まりました。

同科目は、地域力再生の実践例をもとに、行政や企業の役割を探り、政策的視点による新たな展望を見いだすことを狙いとしています。授業には京都府と京都経済4団体が実践報告などで協力します。

京都経済4団体が担当する授業日程・講師・講義内容(テーマ仮)は次のとおりです。

11月15日 黒竹節人氏

(株)くろちく 代表取締役社長
「京町家の活用による賑わい復活の取り組み」

22日 小林正幸氏

(株)京都銀行 常務取締役
「地域力再生における地域金融機関の役割」

12月6日 細尾真生氏

(株)細尾 代表取締役社長

「伝統産業からクリエイティブ産業へ～地域資源活用による海外展開」

立命館のプログラムも本格化

立命館大学の教学部・国際部・キャリアセンター共同実施の「グローバル人材養成プログラム」は5月に開講し、11月までの6カ月間にホスピタリティ特論、ビジネススキル養成合宿、インターンシップ、PBL(課題解決型学習)など盛りだくさんの講義と実習を行います。受講生は外国人留学生を含む50名余りです。プログラムには、京都経済4団体から(財)池坊華道会(華道家元池坊総務所)、サムコ株式会社、株式会社ユーシン精機、株式会社ワコール、京都信用金庫の5社が協力します。

このうち、池坊華道会、サムコ、ユーシン精機の3社が7月までに座学による講義を行いました。ワコールと京都信用金庫の2社については、秋に外国人留学生が国内拠点、日本人学生が上海の拠点(出先機関)を訪問・見学したうえで、PBLを行うといった、ユニークな取り組みが計画されています。

京産大への協力授業 グローバル人材論特殊講義 が7月終了

最終回は「ふりかえり会」、講師も参加

第10回 エリッツ・佐々木氏

京都産業大学「グローバル人材論特殊講義」の第10回講義は6月21日、株式会社エリッツの常務取締役、佐々木茂喜氏が“企業の目的”や“仕事のやりがい”について、自社の業務を例にしながら講話しました。

同社は不動産（住宅・部屋）の賃貸仲介・物件管理が主業務で、家主と借り手の双方を顧客としています。佐々木氏は「扱う商品（物件）は1点もので代替品はなく、仕入れ値も付けられないため、とにかく信頼・信用がよりどころ」「顧客に満足をもたらすことを業務の目的」としているので「企業（エリッツ）の最も重要な目的は顧客の価値創造、すなわちより良い暮らしの提供」と言い切りました。そして“顧客の満足”が、例えば間取りなのか、家賃の額なのか、内装なのか、それぞれの求めによって違うので、それを引き出し対応する力が社員に求められるとしました。

また、自身の体験から、“仕事のやりがい”は業務に数年間にわたって携わり全体像を理解してこそ深まるものと説き、就職前から（あるいは入社直後から）そのようなことにとらわれないようにとアドバイスしました。そして同社では、やり

.....

良い住まいを提供することが企業価値の価値を高める…と佐々木氏



がいが高まるよう、「採用当初の3年間は“仕事”をしっかりと覚えてもらう。次の3年間は後輩に、その次の3年間は社内の人に“仕事”とは何かを教えてもらう。さらに3年間は同じ業界の人に、最後の3年間は他業種の人に教えられるようにしていく」といったプロセスで人材を育成していると話しました。

それらを踏まえて同氏は「就職前に、その仕事は何かを理解するのは難しい。就職先を選ぶときは自分の適正から考えるのではなく、自分に何ができるかを考え、それをさせてもらえる企業を選ぶほうがよい」と話しました。

講話後は「仲介業者として、家主・借り手双方の信頼を構築し両社をつなぐ新たな事業、サービスを考える」との中谷教授出題のテーマで、グループ別にワークショップを行いました。

第11回 西村証券・西村氏

第11回は6月28日、西村証券株式会社取締役社長の西村永良氏が、“地場業者”としてどのような証券業務を行っているかを講話しました。

西村氏はまず、現在の停滞感の強い経済情勢に触れたうえで、「カネが動かないと社会は動かない」「個人も適切な資産運用を行わないとライフプランニングが成り立たない」として、いかにしてカネを動かすか、とくに800兆円と推計される個人資産をどのようにして投資に向かわせるかに話を進めました。

投資には、もちろんリスクが伴うので、それを乗り越えて顧客を獲得するには信用が最重要で、西村証券としては「信用の重要性に徹し、常に会社の繁栄を祈り、生活の向上に期するとともに、よりよい社会をつくる」との社是でもうたっているように、“地場業者”の特徴である地域特化、対面営業、独立系をフルに活かし、



信用を獲得・維持できなければ地場証券業者は
成り立たない…と西村氏

信用の獲得と維持に務めていることを強調しました。

したがって同社が採用したい人物も「まじめな人、何が正しいかを基本に、まともにものを考える人」と明快に示しました。

講話後は「リスクをとってチャレンジする精神を育てるにはどうすればよいか」との中谷教授出題のテーマで、西村氏も交えてワークショップを行いました。

第12回 京都ホテル・平岩氏

京産大の協力講義の締めくくりとなる第12回は7月5日、株式会社京都ホテルの代表取締役社長、平岩孝一郎氏が講話しました。

同氏は日銀出身者らしく、世界経済の動向と今後の見通しを国際収支や為替動向、購買力平価の各国比較などを用いて予測するとともに、日本の産業の今後の行方を論じました。とくに、製造業をめぐる技術過信や空洞化懸念から「何が何でも国内に置いておかねばならない」との論調に凝り固まっている」として、海外展開（グローバル化）の遅れに懸念を述べました。また、国内においては第2次産業の従業員数が減少し、雇用力の後退も顕著なところから、サービス業など第3次産業を中心に成長産業の発掘・育成が重要ではないかと提起しました。



グローバル化は避けて通れず先行きも厳しい
ので、しっかりとした気構えが必要…と平岩氏

そのうえで平岩氏は、受講生らが今後、グローバル時代の社会に出ていくにあたり、どのような生き方を考えていかなければならないか、ヒントを説きました。

講話後はグループに分かれ、中谷教授から提示された「サービス業をどのような分野でどうテコ入れすればよいか——どういったサービスにターゲットを絞って日本経済を再建するか」をテーマにワークショップを行いました。結果はグループごとに発表され、平岩氏の講評を受けました。

「私のグローバル観」発表 半年の学びの成果を披露

7月19日に「ふりかえり会」

京産大の「グローバル人材論特殊講義」の最終授業となる「ふりかえり会」が、7月19日17時30分から京都市下京区壬生川通五上上ルの京都産業大学むすびわざ館で行われ、受講生がグループ討議の結果と、それぞれの見解を織り交ぜた「私のグローバル観」を発表しました。これには、京都経済4団体の協力授業で講話を行った講師12氏のうち5氏、企業関係者、京都経済同友会メンバーが出席。発表を聞くと同時に受講生らと“再会”を楽しみました。京産

大からは法学部長の戸田五郎教授、担当教員の中谷真憲教授のほか、スタッフも多数参加しました、

「ふりかえり会」は中谷教授の挨拶に次いで、4グループによるプレゼンテーションが約1時間にわたって行われました。各グループからは、“グローバル”と“ローカル”の解釈やとらえ方、それにどのように関わり合うのか……などについて、自由な観点から議論した経過と

到達点が発表されました。

そして、受講生と講師陣がフリートークを行い、授業をふりかえりました。受講生は、やはり就職への関心や意欲が強く、就活のアドバイスの求めも多くから聞かれました。

最後に講師3氏から受講生へのエールが述べられました。

(下の写真はいずれも「ふりかえり会」から、下右は受講生にエールを贈る北尾哲郎氏)

